

2月「福沢諭吉と蘭学の里中津を学ぶ」見学会 報告

皆さんこんにちは。4月になり桜も満開になってきました。

今回は、去る2月22日（土）に実施致しました中津の見学会のご報告を致します。



当日は、小雪が少し舞い散る中で、参加者5人ではありましたが、社会医療法人玄真堂川嶌理事長のご配慮により白男川様のご案内を頂きました。深く御礼申し上げます。お陰様で、中津が何故『蘭学の里』と呼ばれるようになったのか、また偉人福沢諭吉が、若い時代にどのような環境で育ったのか等を学ぶ有益な見学会となりました。中津の街中は、数々の歴史的な人物や由緒ある場所の案内板が立ち、理解しやすく、自分たちが歩んできた歴史に誇りを持ち、歴史と調和を保ちながら発展する様子が感じられました。

見学会のルート

《かわしまミュージアム》 ⇒ 《福沢諭吉旧居》 ⇒ 《村上医家史料館》 ⇒ 《大江医家史料館》

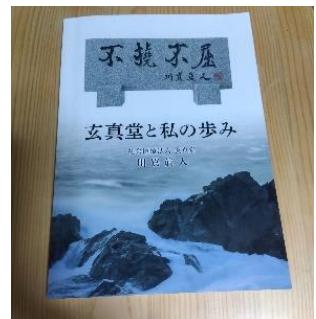
1. 『かわしまミュージアム』(博物館)

かわしまミュージアムは、9年ほど前に川嶌整形外科病院の一角に開設され、一般市民に無料公開されています。蘭学の精神が現在の病院運営に繋がっていることを知り有意義でした。

同病院の経営理念や歴史の紹介とともに川嶌理事長自らが取組まれた「難治性骨髄炎の治療法」が世界標準になったといわれる数々の研究、治療の足跡、実績が展示されていました。

また、ご両親の遺された素晴らしい業績や現医療技術の源流となったと思われる『中津藩と蘭学』に関連した数々の史料も大切に展示されていました。

出版物『不撓不屈 玄真堂と私の歩み 川嶌眞人』(写真)の川嶌理事長の冒頭のご挨拶には「一隅を照らし、一隅に輝き、世界水準の医療を大分県中津市にということを考えて経営してきた」という言葉があり、目に留まりました。川嶌理事長が如何に中津へ熱い思いと愛情を注いでこられてきたのかが伝わってきました。蘭学のこころが今に繋がっている姿を見た思いがいたしました。ミュージアムの見学が未だの方は、是非一度ご見学をおすすめいたします。 (『かわしまミュージアム』住所 中津市宮夫17)



2. 福沢諭吉(1835-1901)旧居、福沢記念館

旧居や諭吉が勉強したと言われる土蔵を見学した後、福沢記念館では、諭吉の遺品・遺墨・書簡をはじめ諭吉関連資料を見学しました。生まれは大坂堂島で、諭吉が1歳6ヶ月の時、父(百助)が他界し、母子6人で中津に帰ってきました。父(福沢百助)は、幼少から漢学に芽生え中津藩の野本雪巖に学び、日出藩の帆足万里の門人となったということも分かりました。百助は苦しい家計のなかでも千五百冊もの蔵書を抱えていたといわれ、この蔵書は、1856年、諭吉が21歳の再度の中津から大坂への出立の時、借財の返済のために臼杵藩に一括(15両)売却したと言われます。(『福翁自伝』)

この多くの蔵書は、それまでの幼少期の諭吉の人間形成に多大な影響を与えたであろうことは推測できます。

3. 村上医家史料館

村上家は、1640年に初代村上宗伯が開業して以来代々この地で医者を業としています。特筆すべ

きことを何点か記します。

- (1) 1819年、7代目村上玄水が、九州で最初の人体解剖を行い、『解体図説』を著わす。
- (2) 1999年、根来東叔の「人身連骨真形図」(写真左下)が、中津市に帰り史料館に展示される。



(村上医家史料館蔵)

これは、1732年、京都の眼科医根来東叔が、処刑後の野ざらしの入骨を観察して描いたものです。この図を国東の三浦梅園は、中津で、東叔の子東鱗より見せてもらい、その感動のあまりすぐに模写したと言われ、著書『造物余譚』にこの「真形図」が収められています。この「真形図」は、その後行方が不明だったのですが、1999年京都の所有者ご厚意により中津市に返還され、現史料館で保管されています。(写真左「中津藩 蘭学の光芒」川島真人著より)

(3) 一節截(竹笛:写真右下)の発見

尺八を原型として、鎌倉時代から様々な階層の人たちに吹き伝えられてきた「中世の竹笛」です。『解

体新書』を翻訳した前野良沢が、翻訳中、一時も手放さなかったといわれます。江戸後期以降は、殆ど姿を消して昨今では幻の竹笛となっていましたが、この幻の竹笛が、村上家から4本発見され、同史料館の館務員が見事復元致しました。

4. 大江医家史料館

- (1) 大江雲澤(1822-1899)

中津藩医の家に生まれ、大坂で華岡青洲の弟・良平に華岡流医術を学び帰郷しました。紀州の医師華岡青洲は、世界で初めて全身麻酔による手術を行いましたが、その時の麻酔薬は、20年もの歳月をかけて開発した「通仙散」。マンダラゲ(別名朝鮮朝顔)という薬草を主成分とするものでした。雲澤は、この麻酔薬を用いた治療法を習得し、帰郷後は大江雲澤塾で、多くの門人を育てたのでした。また中津医学校設立に尽力し、初代校長を務めました。中津医学校は、その後大分医学校となり、現在の大分県立病院へと発展していきました。

- (2) マンダラゲの会と薬草園

川島理事長(中津地方文化財協議会会長)が、和歌山・華岡青洲の「春林軒」を訪問の折、最寄駅の駅員から偶々「マンダラゲの苗」を戴き、自宅で殖やし、それを大江医家史料館の薬草園に移植しました。この薬草園のマンダラゲは、今や薬草園のシンボルとなり毎年春・秋に会の参加者により手入れをされております。華岡青洲や大江雲澤にゆかりあるマンダラゲに直接触れる機会となっております。

(まとめ)

村上医家、大江医家の歴史を辿り、当時の中津の医療技術の高さとともに、常に海外に目を開き自らの医療技術の更なる高みを目指し努力した姿にふれ、頭が下がる思いが致しました。

今回触れた中津の偉人は、まだまだ一部でありました。種痘に成功した辛島正庵や刺激伝導系(ペースメーカー)の田原淳(養父田原春塘を含め)等多くの人材が存在していることが分かり、引き続き探索していくことを思いました。(記 青井勝久)



(村上医家史料館パンフより)